

個が生きる社会科授業の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 和光, 本蔵, 毅 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/592

個が生きる社会科授業の研究

第5学年の実践をもとにして

村上和光・本蔵毅*

Teaching Approach of Social Study "Each Is Live" Through Teaching Practices in the Fifth Grade

Kazumitsu MURAKAMI and Tsuyoshi HONZOH

I. 研究主題について

授業中の自分の意識を振り返ってみると、どちらかというと学級集団として子どもを把握する傾向があり、子ども個々に目を向けることがやや弱かったように思う。例えば、「学級のほとんどの子どもの目が生き生きと輝いていた」など子どもを集団としてとらえた見方をするが多かった。一人ひとりの子どもに目を向けることが大切であることは言うまでもないことである。しかし、どちらかと言えば「いつも手を挙げないA君が今日がんばって挙げている」というように表面的な見方をしてしまいがちであった。そこで、もう少し子ども一人ひとりに注目した研究を行おうと考えた。

しかしながら、本研究は個別学習の研究ではない。あくまでも一斉学習において「個が生きる」にはどのようにすればよいかということの研究するものである。一斉学習の中で一人ひとりの子どもが学級集団とかかわりながら自分の良さを発揮し、助け合い励まし合って成長していく。そんな学級でありたいとの願いから「個が生きる社会科授業の研究」という主題で研究を進めていくことにした。

また本年度は第5学年を担当することになりその実践を通した研究を行いたいと考え、副題を「第5学年の実践をもとにして」とした。

II. 研究主題に迫るために

1. 研究の目的

「個が生きる」ためには、どのように単元を構成したらよいか、どのように1時間の授業を流したらよいか、一人ひとりの発言に教師がどのように対応していけばよいかを、後述する研究の視点を柱にして、少しでも明らかにすることを目的としたい。

2. 研究の方法

- ① 広陽小学校5年1組の子どもと共に授業実践を通した研究をする。
- ② 3つの「研究の視点」を設け、それを研究の柱とする。
- ③ 年間指導計画を立て1年間通した研究を行う。
- ④ 研究授業を行い、整理会などを通してさらに研究を深める。
- ⑤ 1年間の研究をまとめ「成果と課題」を明らかにする。

3. 研究の視点¹⁾

- ① 学習意欲を高める教材を開発する。
 - ・子どもがおもしろいと思う教材の開発
 - ・地域教材の開発
- ② 社会に対する見方や考え方を深めることができるように学習過程を工夫する。
 - ・問題解決的な学習
 - ・体験的な活動
- ③ 子どもが自分の「よさ」を伸ばそうとするように支援する。

5年社会科年間計画表

月	単 元	主 な 目 標	教 材 開 発
4	日本人の食生活 おもな農産物や畜産物の生産地	<ul style="list-style-type: none"> 日本人の食生活が多様化していることに気づく。 農産物や畜産物は、気候・土地条件を生かして生産されていることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 給食の献立調べ 食べ物の種類調べ スーパーのチラシによる生産地調べ
5	米の生産にはげむ人々	<ul style="list-style-type: none"> 米の生産地では品種改良や機械化などの工夫・努力をしていることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の専業農家 特別栽培米 食糧庁
6	野菜の生産にはげむ人々	<ul style="list-style-type: none"> 野菜の生産地では品質の向上や生産性の向上のために工夫・努力していることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 茨城県銚田町のメロンづくり
7	日本の漁業と漁場 工業の発達と私達の暮らし	<ul style="list-style-type: none"> 200海里時代に対応した漁業がすすめられる中で、水産資源を増やす工夫・努力が行われていることに気づく。 工業の発達は生活や産業を変え生活を支えていることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 手取川の鮭の放流 石川県水産総合センター美川事業所 バーコード 家庭電気製品調べ
9	日本の工業の特色	<ul style="list-style-type: none"> 日本の工業は特色をもって発展していることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の工場
10	自動車の生産のさかんな地域 工業の発達と公害	<ul style="list-style-type: none"> 大量で多様な製品を生産するために工夫・努力していることに気づく。 工業の発達に伴い公害が発生したこと、公害を防ぎ環境を守る努力が続けられていることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 愛知県豊田市 酸性雨 熊本県水俣市
11	伝統を生かした工業	<ul style="list-style-type: none"> 伝統的な工業はその土地の自然を生かしながら、昔からの技術を受け継ぎ、地域ぐるみで行われていることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 石川県輪島市「輪島塗り」
12	貿易を通しての世界との結び付き くらしを変えた運輸業	<ul style="list-style-type: none"> 日本は加工貿易で世界の国々と結び付いていることに気づく。 運輸業の発達は生活を変え、産業の発展を支えていることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 輸出品輸入品調べ 貿易相手国調べ 宅配便
1	世界のニュースをすぐに伝える通信・報道 変わる国土	<ul style="list-style-type: none"> 放送・新聞など情報を正しく素早く伝える人々の工夫・努力に気づく。 人口が偏るなどの社会の変化が人々の生活にも変化をもたらしていることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 県内のテレビ局 千葉県浦安市 石川県白峰村
2	国土の保全と森林資源	<ul style="list-style-type: none"> 森林資源は水資源の確保、災害の防止など多様なはたらきをもっていることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 石川県林業試験場
3	よみがえる国土	<ul style="list-style-type: none"> 環境を守るため、人々が工夫・努力していることに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 琵琶湖

・肯定的・共感的な態度

4. 年間指導計画

第5学年であっても地域教材を開発しようとする前のページに掲載したような年間指導計画を立てた。

Ⅲ. 授業の実際と考察

1. 研究の視点①～③と授業の実際

(1) 視点①に関して

子どもが学習意欲を高めることができるようにするためには、子どもがおもしろいと思う教材を開発すること²⁾が大切であると考え。意外性があったり、新しい発見があったり³⁾で興味・関心を持ったことが学習意欲につながるからである。本研究における授業実践の中では、日本の食べ物のはずなのに材料のほとんどが外国から輸入されている「天ぷらそば」などを興味・関心を持たせる手段として単元の中に組み込み、子どもの学習意欲を高めるようにした。

さらに、本研究では、第5学年であってもできるだけ地域教材を開発することにした。地域教材には、次のような点⁴⁾で魅力があるからである。

- ①子どもにとって身近であり興味・関心を持って学習することができる。
- ②実物を見ることができたり、そこで働いている人に実際に会うことができたりする。
- ③観察・見学・調査などを五感を通して行うことができる。
- ④社会的事象を具体的に理解することができる。

実際の授業では、農家の学習の時、子どもが地域の専業農家のTさんに田でインタビューしたり、Tさんに学校まで来てもらい、米づくりの苦労や工夫について話してもらったりした。

また、水産業の学習では、石川県水産総合センター美川事業所が手取川で行っている「鮭の放流事業」を教材開発し、授業実践した。(詳しくは後述する)

(2) 視点②に関して

子どもが自分なりに社会に対する見方や考え

方を深めることができるようにするために「問題解決的な学習を行う」ということと「体験的な活動を取り入れる」ということを学習過程を構成する際の重点とした。

問題解決的な学習では、問題意識を持って調べていき、他の考えも聞きながら、自分なりに社会に対する見方や考え方を持つことができるからである⁵⁾。そして、それを元に自分なりの方法で表現することによって深めていくのである。この表現に関して、本研究では特に単元の終末におけるまとめとしての表現活動に力点を置いた。1学期は学習の仕方を身につける時期であるから、問題解決的な学習の仕方を身につけるとともに様々な表現の仕方を自分で選んでできるようにする力をつけるため、グループごとに模造紙にまとめたり、TPシートにまとめたり、一人ひとりが新聞づくりをしてまとめたりと単元ごとに表現の仕方を変えることにした。

また、体験的な活動は子どもをより意欲的にすることができるとともに豊かな感性を養い実感のある社会認識の形成に役立たせることができる⁶⁾。

本研究においては、1学期に、2種類の米を学校の家庭室で炊いて食べ比べたり、メロンを実際に食べてみたりした。2学期には手取川に鮭が戻ってくるので、石川県水産総合センター美川事業所へ見学に行き、体験的な活動を行うことを予定している。

(3) 視点③に関して

子ども一人ひとりに、その子なりの「よさ」がある。その「よさ」を、子どもが自ら伸ばそうとするように支援することは、「個が生きるためにとっても大切なことである⁷⁾。そのためには、これまでの「知識・理解」のみに重点をおいた指導観からの転換を図り、自ら学ぶ意欲・思考力・判断力・表現力などを養うことこそ大切であるという考えで指導していかなければならない⁸⁾。これまではどちらかといえば、学習の結果だけを、しかも多くの場合ペーパーテストによる評価を重要視していたように思う。「知識・理

5年1組 社会科学習指導案

1995.6.21(水)3限 7.1(土)5限

指導者 広陽小学校 本蔵 毅

1. 小単元 手取川の鮭の放流
2. 目 標
 - ・水産総合センターの仕事のようすや鮭を保護・育成していく工夫・努力について関心を持ち、意欲的に調べようとする。
 - ・水産総合センターの人は、鮭を貴重な資源として保護・育成していこうと工夫・努力していることに気づく。
3. 指導にあたって

(1) 教材観

昭和52年5月、国際的に200海里体制が定着したうえに、公海で漁場規制がなされるなどにより、「とる漁業」から「育てる漁業」への転換が図られるようになった。そのような状況の中で、内水面水産試験場美川分場(現水産総合センター美川事業所)では、昭和53年12月に、北海道から鮭の発眼卵300万粒を移入・孵化・飼育し、昭和54年2～3月に初めて手取川に稚魚を放流した。以後継続して放流を続けた結果、昭和56年から放流魚の回帰が認められた。その後回帰する鮭の数はだんだん増えていき、昭和63年からは、手取川回帰親魚から採取した卵のみで放流用稚魚の確保が可能となり現在に至っている。回帰率はわずか0.3～0.6%であるが、そこまで上げるためには、並々ならぬ努力があった。このように、鮭資源を保護・育成するために、水産総合センター美川事業所の人たちが行ってきた工夫・努力に気づくようにしたいと考えている。

(2) 児童観

子どもたちの食卓には、鮭が身近に存在している。「鮭の切り身」「鮭の缶詰」「鮭のふりかけ」などである。しかし、その鮭がどこでとれるかということにはほとんど関心がないであろうし、まして手取川で鮭がとれることなど考えもしていないであろう。だからこそ、子どもたちは、手取川で鮭がとれるということや回帰する鮭の数が300倍も増えていること(昭和53年度48尾→平成3年度14,583尾)に驚き、その鮭を増やそうとしている水産総合センターの人たちの工夫・努力を意欲的に追究していくのではないだろうか。

(3) 指導観

鮭は貴重な水産資源である。水産総合センターの人たちは、回帰率がわずか0.3～0.6%であってもこれからも鮭資源を増やしたいという願いを持ってこの仕事をし続けている。この思いに子どもたちが追われるように支援していきたい。

そのために、問題解決的な学習を行い、「鮭ってどんな魚だろう」「水産総合センターの人たちはどんな仕事をしているのだろう」という問題意識を持って、調べ学習をするようにしたい。その際に水産総合センターの職員である杉本さんという人物に焦点をあて、吹き出しやビデオを使い、杉本さんが子どもたちに語りかけるという方法で学習を進めていきたい。

4. 学習計画（総時数10時限）

次	めあて	主な思考の流れ	教師の支援と評価
<p>第一次 手取川の鮭 (2)</p>	<p>手取川で鮭がとれ、その数が増えていることを知り、その理由を考える</p>	<p>〈何をしているのだろう〉 ・鮭をとっている 〈ここはどこだろう〉 ・北海道の川 ・手取川 ・手取川で鮭がとれるなんてびっくりした 〈手取川で鮭はどれくらいとれるか〉 ・昭和53年…48匹→平成3年14,583匹 ・約300倍に増えた どうして鮭が300倍も増えたのだろう ・帰って来る鮭の数が増えたから ・稚魚を育てて放流したから</p>	<p>・手取川で鮭を捕獲しているビデオを放映する ・手取川であることを伝える ・手取川での鮭の漁獲数を表したグラフを提示する ◎問題意識を持つことができる</p>
	<p>手取川の鮭が増えている理由を調べる計画を立てる</p>	<p>〈何をどのように調べていくか〉 ・「鮭ってどんな魚か」を図書室等で調べる ・「どのようにして稚魚を育てて放流しているか」をビデオ・写真などから調べる</p>	<p>・調べる視点を明確にする</p>
<p>第二次 鮭調べ (3)</p>	<p>鮭がどんな魚かを調べ鮭の生態や鮭漁の現状などがわかる</p>	<p>〈鮭ってどんな魚だろう〉 鮭の生態 ・親鮭の体長65～75cm体重3kg ・生まれた川に産卵のため帰って来る ・卵はメス1匹の中に2,500～3,500粒ある ・産卵後鮭は死んでしまう ・生まれた稚魚は春に海へ下って行く ・鮭は北洋（ベーリング海など）で育つ ・手取川は鮭の放流事業の南限である 鮭の輸入 ・鮭は外国からたくさん輸入されている ・〈たくさんとれるのにどうしてだろう〉 ・鮭を食べる人が増えて足りなくなったから 200海里の問題 ・200海里体制が定着し、鮭の漁場が狭められ遠洋での漁獲高が減った→輸入が増えた 鮭の放流 ・北海道では鮭をたくさん放流している ・放流した時1gだった鮭が3kgに育って帰って来る</p>	<p>・鮭の生態を中心に図書室の図鑑などを使い調べるようにする ・発表する際に理科的な「鮭の生態」についての発表を先に行い社会的な事柄は後から発表するようにして第3次につなげる ・200海里の問題など社会的な問題にもふれる ・調べたことを発表した後「サケの誕生」というビデオを放映する</p>
<p>第三次</p>	<p>水産総合センターの杉本さんたちは鮭を増やすために</p>	<p>〈水産総合センターの杉本さんたちはどんな仕事をしているのか〉 ・手取川で鮭をつかまえている ・鮭から卵を取り出し受精させている</p>	<p>・「手取川」というビデオや写真より水産総合センターの仕事のようすがわ</p>

<p>鮭資源の保護・育成</p>	<p>様々な工夫・努力をしていることに気づき、その結果鮭の数が増えたということがわかる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鮭の卵を孵化させ稚魚を育てている ・ 稚魚が少し大きくなったら手取川に放流している ・ 手取川に帰って来た鮭を全てつかまえ鱗の模様から何年で帰って来たかを調べている ・ 病気にならないように気をつけている ・ 0.6gで放流していたものを1.0gで放流するようにした <p>〈わずか0.4g増やすためにどんなことをしているのか〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 環境をよくするようにしている ・ 水質を保つように心掛けている <p>①換水率を上げた ②餌の残りやふんをこまめに取り除いている</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>水産総合センターの杉本さんたちが放流する鮭を大事に育てて大きくするなどの工夫や努力をしているから手取川の鮭の数が増えたのだ</p> </div>	<p>かるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 杉本さんの話を吹き出しに書いて提示する ・ 昭和62年度から行い平成4年度から全部1.0gになったことを伝える ・ 杉本さんにビデオに登場してもらい話してもらおう <p>◎鮭の数が増えた理由を自分の言葉でまとめることができる</p>
<p>(3)</p>	<p>水産総合センターの杉本さんたちが毎年鮭を放流し続けていることが鮭資源の保護・育成につながっていることに気づく</p>	<p>〈14,583匹帰って来るのに何匹ぐらい放流するのだろう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 倍の3万匹ぐらいではないか ・ 500万匹なんてすごい ・ 1,000匹のうちの3匹しか帰って来ない <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>わずかしか帰って来ないのにどうしてこの仕事を続けているのか</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大事に育てた鮭だから1匹でも帰って来てほしい ・ もっと鮭が帰って来るようにしたい <p>〈杉本さんの話を聞いてみよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1,000匹のうち3匹しかではなく3匹も帰って来るようになった ・ 鮭がもっとふえるようにがんばりたい <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>杉本さんたちは大事に育てた鮭が1匹でも多く帰って来ることを願ってこの仕事を続けている。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 予想した後放流数の移り変わりを表したグラフを提示する <p>◎問題意識を持つことができる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 石川県全体の鮭の漁獲高の移り変わりを表したグラフを提示する ・ ビデオで杉本さんの話を放映する <p>◎杉本さんたちの思いを感じ取ることができる</p>
<p>第四次まとめ(2)</p>	<p>学習してきたことを新聞にまとめてみることが出来る</p>	<p>〈鮭の学習を「新聞づくり」でまとめよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 鮭ってどんな魚か ・ 水産総合センターの杉本さんたちはどんな仕事をしていたか ・ 杉本さんたちはどんな思いでこの仕事を続けているのか ・ 自分はどんな感想を持ったか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ファックス原紙に一人ひとりがまとめ、印刷して全員分綴じる <p>◎他の人の新聞を読みよい所を見つけることができる</p>

5. 本時の学習①（第1次中の1時）

(1) 題目 手取川の鮭

(2) めあて ・手取川で鮭がとれるということや、この鮭は稚魚を放流したものが大きくなって帰って来たものであり、その数が増えているということを知り、鮭とはどんな魚であるか、稚魚を放流するためにどんな仕事をしているかという問題意識を持つことができる。

(3) 学習過程

学 習 活 動	主 な 思 考 の 流 れ	支 援 と 評 価
<p>1. 鮭を捕獲しているようすを見て気づいたことを話し合う (15)</p> <p>2. 捕獲される鮭の数が増えているということを知りその理由を考える (20)</p> <p>3. 考えをもとにこれからの学習問題をつくる (10)</p>	<p>〈何をしているところだろうか〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・魚をとっているところ ・「やな」というものを使って鮭をとっているところ ・鮭がたくさんとれている ・手取川で鮭がとれるとは思わなかった <p>◇鮭の数はだんだん増えている</p> <p>昭和53年度…48尾 (300倍)</p> <p>平成3年度…14,583尾 ←</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>どうして鮭が300倍もとれるようになったのだろうか</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・帰って来る鮭の数が増えたから ・手取川がきれいになったので鮭の数が増えたから <p>◇鮭をとっている人は漁師さんではない</p> <ul style="list-style-type: none"> 水産総合センターの職員がとっている 水産総合センターの職員がとっている ・漁師さんではない人がどうしてとっているのだろう ・鮭が増えたことに関係しているのではないか <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>鮭ってどんな魚だろう 水産総合センターの人はどんな仕事をしているのだろう</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・「手取川サケ祭り」のビデオより鮭を捕獲しているところを放映する ・「やな」という言葉は教える ・手取川での鮭の捕獲数を表したグラフを見せる ◎問題意識が持てる ◎自分の考えが持てる ・鮭って帰って来るのかと問い返し鮭の生態に興味を持つようにする ・水産総合センターの存在を知らせどんな仕事をしているところか興味を持つようにする ◎学習問題をつくることができる

6. 授業記録一①

- T₁ ビデオを見ます。
(ビデオ放映)
- T₂ 何をしていますか。
- C₁ 魚をとっています。
- C₂ 鮭をとっています。
- C₃ 網の中から鮭をとっています。
- C₄ 2人でいて、1人だけつかんで、1人は網を持っています。
- C₅ わなをかけています。
- C₆ おびきよせています。
- T₃ やなで鮭をとっているところです。かごしか映っていないけど、やなもあります。やなから、かごのところにおびきよせています。
- C₇ 魚をとっている。
- T₄ その魚は鮭です。
- C₈ キラキラしてきれい。
(鮭の実物大の絵を黒板にはる)
- C₉ これが鮭?
- T₅ ここはどこですか。
- C₁₀ 川。
- C₁₁ 海。
- C₁₂ 海の近く。
- C₁₃ 川の上流。
- C₁₄ 川の河口。
- C₁₅ 湖。
- T₆ どうしてそう思ったの?
- C₁₆ 鮭は卵から生まれて、大きくなって川にのぼっていくから。
- C₁₇ 卵を生む時、川の上流までのぼっていくから。
- C₁₈ 海だったら、そんなに浅くないから。
- T₇ 本当にそうか、ビデオで確認しましょう。
(ビデオ放映)
- T₈ 浅いね。
- C₁₉ 水が流れていた。
- T₉ これは川です。どこの川だと思う?
何県でも、何地方でもいいよ。
- C₂₀ 地図帳で調べればいい。
- C₂₁ 資料集46ページにもでてるよ。

- C₂₂ 北海道や東北でさかんって書いてある。
- C₂₃ 資料集47ページに川にもどって来た鮭をとると書いてあります。
- C₂₄ 教科書36ページにも出ています。
- C₂₅ 北海道がわに鮭がかいてあります。
- C₂₆ 地図帳の44ページ(北海道の地図)にも出ています。
- C₂₇ 44ページの上の網走というところに鮭の絵がかいてあります。
- C₂₈ 釧路川の河口にも鮭の絵がかいてありません。
- T₁₀ ビデオで確かめたいと思いますが、ビデオを代えます。(ビデオテープの具合が悪かったことと遠景を映したかったことによる) 同じ場所です。どこかな?(ビデオ放映)
- T₁₁ どこでしょう。
- C₂₉ ?
- T₁₂ ここは手取川です。
- C₃₀ 手取川?
- C₃₁ うそや~!
- T₁₃ 手取川でも鮭がとれたのだよ。
- T₁₄ 1年間にどれだけとれたと思う?
- C₃₂ 70匹以上
- T₁₅ 昭和53年度48匹
昭和54年度140匹
:(カードをめくっていった)
- C₃₃ え~ (増えた時の反応)
- C₃₄ ありゃ~ (減った時の反応)
- C₃₅ 9,000!
- C₃₆ あ~!
- T₁₆ 平成3年度14,583匹
- C₃₇ 14,583匹……
- T₁₇ 昭和53年度48匹だったのが平成3年度には14,583匹に増えました。
- T₁₈ これをグラフにしてみました。
(グラフ提示)
- C₃₈ 先生、気づいたことある。
- C₃₉ 上がったたり、下がったりしている。
- C₄₀ 最初は少ないです。
- C₄₁ どうして少なくなったのかな?

- C₄₂ 海から川へ行って、とられたりして、少なくなつた。
- C₄₃ 卵のまま死んでいって少なくなつた。
- C₄₄ 手取川のダムにのぼってくる時、いっぱい死んだ。
- C₄₅ ダムってのぼれんよ。
- T₁₉ 昭和53年に48匹だったのが、平成3年には14,583匹になつたね。
- C₄₆ ごつつう上がつとる。
- T₂₀ 何倍になつた？
(15,000÷50)
- C₄₇ 3,000。
- C₄₈ 300倍。
- C₄₉ おそろしい。
- C₅₀ すごいなあ。
- T₂₁ 何がすごいと思つたの。
- C₅₁ 300倍になつたことです。
- C₅₂ 13年間で300倍！
- T₂₂ どうしてこんなに増えたのかな？
- C₅₃ 13年間に何があつたのかな？
- T₂₃ 問題をつくりましょう。
- C₅₄ 13年間で鮭のとれた数が300倍
- C₅₅ 「約」いるよ。
- C₅₆ 13年間で鮭のとれた数が約300倍に増えた。
- C₅₇ ひみつは。
- C₅₈ 何だろう。
- 13年間で鮭のとれた数が約300倍に増えたひみつは何だろう
- C₅₉ 予想持てたよ。
- T₂₄ 考える時間ほしい人。
- C₆₀ (ほぼ全員挙手)
- T₂₅ 時間は何分？
- C₆₁ 3分！
- C₆₂ 5分！
- T₂₆ 一応3分にしましょう。
:
- T₂₇ 考え持てた人。
- C₆₃ (数人挙手)
- T₂₈ 誰かと相談したいなと思う人。
- C₆₄ (ほぼ全員挙手)
- T₂₉ 自分で相談したいなと思う人の所へ行つて

- 相談してごらん。
- C₆₅ 先生、多くなつたわけやね。
- T₃₀ そうだよ。
:
- T₃₁ 考え持てた人、もどつて下さい。
- C₆₆ 1回つかまえて、卵をうませてから、小魚になるとまた川へもどすというやり方で増えたんだと思う。
- T₃₂ そんな考えの人いますか。
- C₆₇ あゆとおなじように放流しているんだと思います。
- C₆₈ 放流して何なん？
- C₆₉ 昔は、やなどかなかつたけど、それに比べて今は、機械とかいっぱいあるから増えたんだと思います。
- T₃₃ 道具のこと……
- C₇₀ 道具でなくて、機械化でたくさんとれるようになったんだと思います。
- C₇₁ 昔は鉄とかあまりないから、やなどかこわれやすかつたけど、今はにげていかなからだと思う。
- T₃₄ 今はたくさんつかまえられるの？
- C₇₂ 鮭がいっぱい来たから、移動して来るようになったから。
- C₇₃ たくさん来るようになった理由は？
- C₇₄ 鮭は人工受精をして、他の魚に食べられないように、工場で育てているんだと思う。
- C₇₅ 人工受精って何や？
- C₇₆ 産卵が終わると、卵を探しに出て、1つも死なないように大切に育てた。
- C₇₇ 腹切るなんてかわいそう。
- C₇₈ それで、絶対死なんやろうという時に、放す。
- C₇₉ 資料集の47ページの下の方に、鮭の回遊というところがあります。卵からかえって小さい時に日本を出てアメリカ合衆国へ行つて、また日本に帰ってくるげ。
- T₃₅ 回遊って何やろね。
- C₈₀ 鮭に餌をたくさんあげて、卵をたくさん産ませたんだと思う。*

7. 本時の学習② (第三次中の3時)

(1) 題 目 鮭資源の保護・育成

(2) めあて 水産総合センターの杉本さんたちは、鮭が1匹でも多く帰ってくることを願って放流の仕事が続けていることに気づく。

(3) 学習過程

学 習 活 動	主 な 思 考 の 流 れ	支 援 と 評 価
<p>1. 鮭の放流数の多さと回帰数の少なさに気づき問題意識を持つ (15)</p> <p>2. 杉本さんたちが放流の仕事が続けている理由を考え話し合う (25)</p> <p>3. まとめる (5)</p>	<p><14,583匹帰ってくるのに杉本さんたちは何匹ぐらい放流するのか></p> <ul style="list-style-type: none"> ・倍の3万匹ぐらいではないか ・10倍の15万匹ぐらいではないか ・最近では毎年500万匹ぐらい放流している ・500万匹なんてすごい ・ほんの少ししか帰って来ないのか <p>◇1,000匹のうちの3匹(0.3%)しか帰って来ない</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>鮭がわずかしか帰って来ないのでどうしてこの仕事が続けているのか</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・大事に育てた鮭だから1匹でも帰って来てほしい ・鮭が好きだから ・もっと鮭が帰って来るようにしたい。 ・外国から輸入するのではなく石川県に帰ってくる鮭を増やしたい ・200海里体制の中で鮭の漁獲高を増やすため<杉本さんの話を聞いてみよう> ・鮭は片道5,000kmも旅して帰って来る ・1,000匹のうちの3匹しかではなく3匹も帰って来るようになった ・鮭がもっと増えるようにがんばりたい <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>杉本さんたちは大事に育てた鮭が1匹でも多く帰って来ることを願ってこの仕事が続けている</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠のある予想ができるようにする ・放流数の移り変わりを表したグラフを提示する ・絵図を使いいかに少ないかを示す <p>◎問題意識を持つことができる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・石川県全体の鮭の漁獲高の移り変わりを表したグラフを提示する ・第2次の発表に使った模造紙の資料も根拠とする ・ビデオで杉本さんの話を放映する <p>◎杉本さんたちの思いを感じ取ることができる</p>

8. 授業記録②

- T₁ じゃあ始めます。
昨日、勉強終わった時ノート書きましたね。
昨日書いたところ言って下さい。
- C₁ 杉本さんは鮭を放すためにいろいろな苦勞
をしています。
- C₂ 人工授精というのをしていました。
- C₃ 鮭を強くしていたから、鮭を波より強くし
たいから、人工授精して、本当は0.6gだっ
たけど、1.0gにした。
- C₄ 1.0gにして、他の魚とかに食べられないよ
うにした。
- C₅ 昔は0.6gだったのを1.0gにして強い波が
きても負けないようにした。
- C₆ 杉本さんたちが、掃除したり、水を増やし
たりして、鮭を育てていた。
- C₇ 杉本さんたち何人で仕事をしているの。
- T₂ 10人ぐらいです。
- T₃ 杉本さんたちが一生懸命仕事したおかげ
で、鮭の数が増えたのでしたね。平成3年
には何匹帰って来たの？
- C₈ 14,583匹です。
- C₉ 昭和53年は48匹でした。
- C₁₀ それは手取川でとれた鮭の初めの記録で
す。
- C₁₁ 増えた数は14,535匹です。
- T₄ この14,583匹が帰って来るためにどれだけ
放流したでしょう。
14,583匹放流したら14,583匹帰って来たの
かな？
- C₁₂ 14,583を3で割った数だと思います。
- T₅ 3で割ったぐらい。そうしたら、5,000ぐら
い。
- C₁₃ 3匹に1匹しか帰って来ない。
(放流数と回帰数とを混同している)
- C₁₄ 群れになって帰って来る。
- C₁₅ ちがうと思う。たぶん……
多い数放流して、少なく帰って来たんじゃないが
……少なくて悩んだんじゃないが……
……それで輸入しとるんじゃないが……

- T₆ 少なく放流していっぱい帰って来ると思っ
た人。
- C₁₆ 1年で帰って来れないからたままって増える。
- C₁₇ 鮭の中には3年で帰って来るものもあれ
ば、4年で帰って来るものもある。
- C₁₈ 3年でいっぺんに帰って来ることになるん
じゃ……
- T₇ そうしたら杉本さんは3年にいっぺんしか
仕事しないんじゃないが？
- T₈ 手取川で、13年間でこれだけになった(O
HPでスクリーンに手取川の鮭の漁獲高の
グラフを映す)
- C₁₉ 毎年帰って来るけど……
- C₂₀ 1年前にとった数を知りたいです。
- T₉ 1年前は12,398匹だけど、これ(14,583匹)
になるには3、4年前のところを見ないと
いけないんだよ。
- C₂₁ 昭和62年。
- T₁₀ 昭和62年のを知りたいの？
8,285匹とれました。
- C₂₂ 4年後に放流した数より大きい小さい
か。(卵の数を使い計算している)
- T₁₁ 少ないと思っている人は……
- C₂₃ これくらい。(5,000匹のこと)
- T₁₂ 多いと思っている人はどれくらい？
- C₂₄ 16,000匹。
- C₂₅ 15,000匹～20,000匹ぐらい。
- T₁₃ これくらい(15,000～20,000)の人？
- C₂₆ (ほとんど拳手)
- C₂₇ 3,000個やろ……(1匹の鮭が産む卵の数の
こと)
- T₁₄ 数字言っていけますよ。
昭和53年度298万7千匹
:
昭和62年度519万5千匹
- C₂₈ 全然ちがう。
- C₂₉ 予想はずれた。
- T₁₅ 519万5千匹放流したら……ピントこんや
ろうけど……1,000匹放流して……

(模造紙に鮭を1,000匹はり,うち3匹を赤くぬったものを黒板いっぱいにはる)

- C₃₀ 先生, 稚魚軍団全滅したことある?
- T₁₆ 1,000匹のうち,帰って来るのは,3匹です。
- C₃₁ え~!
- T₁₇ どうして「え~!」と思ったの?
- C₃₂ こんだけ稚魚がおるがんに……
- C₃₃ そんな時は0.6gやったんかも。
- T₁₈ 一生懸命仕事して……997匹は? 3匹しかもどらん……
- C₃₄ そんなにたくさんおって,3匹しか帰って来ないから,3匹は奇跡的……
(杉本さんの写真掲示)
- C₃₅ 苦勞するげんから,かわいそう。
- C₃₆ なんで1,000匹から3匹しか帰って来ないの?
- C₃₇ 全部死ぬの?
- C₃₈ 他の川へ行くんじゃないかな。
- C₃₉ 病気になるから。
- T₁₉ 杉本さんこれからもこの仕事続けていくかな?
- C₄₀ 鮭食べたい人いっぱいいる。
- T₂₀ どうして続けていくか,ノートに書く問題をみんなで作りましたよ。
- C₄₁ 杉本さんたちは13年間……
- C₄₂ 全滅……ほぼ全滅になっている鮭。
- C₄₃ 全滅しそうな鮭を……
- C₄₄ どう守るか……どんな風にするか。
- T₂₁ 自分が杉本さんだったら? 3匹しか帰って来ないけども,杉本さんは今日も仕事をしているんでしょう。それを問題にして……
- C₄₅ 杉本さんたちは1,000匹のうち3匹しかもどって来ないのに仕事を続けているのはどうしてか。
- T₂₂ 考え書いてごらん。
1分?
- C₄₆ え~!
- C₄₇ 5分。

- C₄₈ 10分。
- T₂₃ 5分ぐらいを目安にしましょう。
:
- C₄₉ 鮭を育てているうちに楽しくなった。
- C₅₀ 鮭を食べたい人がいるから,一生懸命仕事を続けている。
- C₅₁ カブトガニみたいに少なくなると食べられなくなるから。
- C₅₂ 昔は放流しなくても鮭がいた。今は放流しなくてもいるようにしたい。
- C₅₃ 3匹しかもどって来ないからよけいがんばろうとしている。
- C₅₄ 鮭ができるだけたくさんもどって来てほしいから。
- C₅₅ 3匹でも人は喜んで食べてくれるから
- C₅₆ 鮭を飼うのが楽しくてしょうがないから。
- C₅₇ ただ売るだけでいいなら,いちいち世話しないでいいやろう。杉本さんたちは鮭が好きなんだと思う。
- C₅₈ ずうっと続けていれば,いつかはたくさんもどってくるかもしれないと楽しみにしている。
- C₅₉ 鮭をたくさんふやしたい。
- C₆₀ 3匹でも卵をまた孵化して育てて増えることを期待している。
- C₆₁ 鮭が好きだから全滅させたくない。
- C₆₂ 鶴来町の鮭を全滅させたくない。
- T₂₄ 鶴来町だけでなく手取川の鮭をね。
- C₆₃ その紙(黒板にはってある鮭のこと)はオスか?
- C₆₄ 少ない方が高いからたくさんせん方がいいんじゃないが?
- C₆₅ 仕事を続けている人がいなかったら,鮭を食べられない人がいるし,杉本さんは鮭を食べるのが好きだから,仕事を続けている。
- C₆₆ もっと消費者に喜んでもらえるように。
- C₆₇ 自分も食べたいとんだと思う。鮭がおいしいから。
- T₂₅ 本当はね。今日杉本さんに来てもらえばいいんだけど,お仕事で来られない。

今日はビデオを用意しました。見て下さい。
(ビデオ用意)

T₂₆ 自分たちが考えたことと杉本さんが考えていることを比べてみましょう。

杉本さんの話(要約)

1,000匹のうちの3匹しかではなく、われわれは、1,000匹のうちの3匹も帰って来ると考えています。

石川県の場合、鮭は北太平洋まで、片道5,000 kmも旅し、3～4年たつて親になって帰って来るとは、他の魚に食べられたり、他の県の漁師さんにとられたりします。

昔は、1,000匹のうち1匹だったのを、今は1,000匹のうち3匹にしたのです。将来は1,000匹のうち10匹帰って来るようにしたいと思っています。

また、この鮭の放流事業は、日本では明治の時、石川県出身の人(関沢明清)が始めたということもあります。

これからがんばって、鮭の親がたくさん帰って来るようにしたいと思っています。

T₂₇ 杉本さんの話を聞いて、どんなことを思いましたか。

C₆₈ 鮭のことに一生懸命だと思いました。

C₆₉ 昔は1,000匹のうち1匹なのに、今は1,000匹のうち3匹になったから杉本さんたちはがんばっているのだなと思いました。

C₇₀ 杉本さんたちは1,000匹のうち3匹帰って来ることがすごいと思っています。

C₇₁ たくさんもどつて来るだけでもすごいと思います。

C₇₂ 努力して1,000匹のうち3匹に増えているから、努力しているのだなと思いました。

C₇₃ 杉本さんたちは1,000匹のうち3匹になって1,000匹のうち10匹帰って来るようにしたいと思っています。

C₇₄ 杉本さんたちは、ちゃんと目標を持っているのだなと思いました。

C₇₅ 杉本さんたちは1,000匹のうち10匹帰って来るようにしようと、まだ、もっともっと努力しています。

C₇₆ 杉本さんたちは努力したり工夫したりしています。

C₇₇ 杉本さんたちは鮭のことをよく考えて行動していると思います。

C₇₈ 杉本さんたちは1,000匹のうち3匹帰って来るようになって、とても努力とかがんばっています。

C₇₉ 1,000匹のうち1匹しか帰って来ない時もあったんだなあと思いました。

C₈₀ 私たちは1,000匹のうち3匹しか帰って来ないと思っていましたが、杉本さんたちは1,000匹のうち3匹も帰って来ると考えています。

C₈₁ 1,000匹のうち3匹ももどつて来るようになったから、それまでたいへんなことをしているのだなと思いました。

C₈₂ 1,000匹のうち3匹はすごい数なんだなと思いました。

T₂₈ 杉本さんは、みんなの思っていることも全部ふくめて、考えていると思うよ。所長さんも2学期になったら来て下さいと言っていたよ。2学期になったら、見学に行つて、杉本さんたちの仕事を見てきましょう。

T₂₉ 今日はこれで終わります。

※

C₈₁ 鮭は冷たい水が好きだから、多い時は水が冷たかったんだと思う。ずっと増えていくわけじゃないから。

T₃₆ 先生は、みんなの意見を聞いて、こんなことを考えました。こちら辺り(板書)は、人が何かしているんじゃないか、ここ(板書)は……

C₈₂ 自然という感じ。

T₃₇ ここは、鮭のことをもっと調べたらいいんじゃないかな。ここは人がしていることを調べたらいいんじゃないかな。

解」のみに重点をおいていたからである。しかし、これからは、学習の過程における評価をもっと大切にしていかなければならないと考える。自ら学ぶ意欲・思考力・判断力・表現力などは、学習の結果だけで評価すべきものではないからである⁹⁾。このような考え方に立って子どもの「よさ」が伸びるように支援していくことにより「個が生きる」のではないかと考えるのである。

実際の授業においては、例えば、学習に興味・関心を抱くようにと、本物の銚田町のメロンを持ち込み、学級全員で試食した後で「銚田町のメロンのおいしさのひみつは何だろう」と学習問題をつくり追究していった実践など様々な場面で支援していった。

2. 「手取川の鮭の放流」の実践より

(1) 教材について

子どもはこれまで「七ヶ用水の開発と技権兵衛の学習」など手取川に関係した学習を何度も行っている。今回はその手取川での「鮭の放流事業」を教材として開発した。上述したことなどにより、手取川は子どもにとって他の川よりも身近に感じられる川である。しかし、その川で「鮭の放流事業」が行われていることを、ほとんどの子どもは知らなかった。鮭はどこか遠くの海のものであり、多くの子どもは切り身の鮭しか見たことがないようすであった。したがって、本時①の授業記録にもあるように鮭の実物大の絵を見せただけで「C。これが鮭？」と初めて見た驚き交じりの声となったのである。さらに、手取川で鮭がとれるという事実を知ったとき「C₃₁うそや〜！」と大変驚いた反応となって表れたのである。

このように、この教材は、子どもにとって意外性があり、新しい発見がある教材である。しかも、鮭をふやそうと工夫・努力している姿が見え、そのことを見学を通してさらに深めることができる教材である。

(2) 単元構成について

水産業の学習は、「とる漁業」と「育てる漁業」の2つをそれぞれ小単元として構成して授業実

践を行うのが通常のやり方であろう。しかしながら、200海里体制が確立し、水産資源保護が叫ばれている今日においては、「育てる漁業」が非常に重要となっている。それで本研究における水産業の学習も、「育てる漁業」に重きをおくことにした。この条件を満たし、しかも地域教材のよさも生かせる「手取川の鮭の放流事業」を教材化し、問題解決的な学習となるように前掲のような単元を構成したのである。

この単元構成で学習を進めていく時に、特に重視した点は、次の4つである。

- ①第一次で鮭に興味・関心を持ち、手取川でとれる鮭の数が増えている理由を調べていこうとする問題意識を持つことができるようにすること。
- ②第二次で「鮭の生態（鮭は母川回帰することなど）」や「鮭の放流事業の大まかなようす（200海里体制など『とる漁業』の問題点もふくめて）」について調べることを通して水産資源として鮭をとらえるようにすること。
- ③第三次で水産総合センターの人たちが水産資源である鮭を増やすために様々な工夫・努力をしていることに気づくようにすること。
- ④第四次でこれまで学習してきたことを「新聞づくり」の活動を通してまとめることができるようにすること。

以上4つの重点のうち、本単元の学習を終えて特に問題が残った②について述べたい。

第二次では、上述した事柄についてグループごとに調べていった。しかしながら、「とる漁業」の問題点への追究が弱く、鮭を水産資源としてとらえられないまま第三次に入ってしまった。200海里体制などによる鮭の漁獲高の減少とそれともなうサケ・マス漁業船の減少、そして失業などの問題についてもう少し時間をかけていねいに学習すべきであった。そのことによって、第三次では、水産総合センターの人たちの工夫・努力に気づくことはできたが、水産資源の保護育成のために仕事に励んでいることをとらえる点では非常に弱いものとなってし

まったのである。

(3) 本時の学習について

a. 本時の学習—①

本時の学習—①は、本単元の導入であり、鮭に興味・関心を持ち、鮭について意欲的に調べていこうとするようにしなければならない大事な時間であった。

まず、導入での鮭との出会いであるが、本時ではビデオによる鮭を捕獲している場面の映像と実物大の鮭の絵を用いた。本物の鮭を持ち込めればよかったのだが、6月であったため、手取川に鮭はまだ帰って来ていなかった。したがって、ある程度の驚きや興味・関心を抱かせることはできたが、できれば実物を提示した方が効果的であると考ええる。

次に、学習問題をつくる場面であるが、昭和53年から平成3年までの手取川における鮭の漁獲高の移り変わりを表したグラフを提示し、その読み取りを通して「13年間で鮭のとれた数が約300倍に増えたひみつは何だろう」という学習問題をつくった。ここでは確かに学習問題はできたが、グラフが上がったり下がったりしながら全体としては上がっているというもので、「どうして下がったのだろうか」という疑問も出されたが、そのことは後で考えようとさりと受け流さなければならなくなった。このようなことで強い問題意識にはならなかった。この場合グラフが毎年のデータとなっているが子どもの実態を考えると、隔年のデータでグラフをつくり、漁獲高が増えていることだけに注目させた方がよかったのではないかと思う。

その次に、学習問題に対する自分の考えを発表した後で次時につなげる場面では、鮭が自然に増えたという考えと人工的（放流など）に増えたという考えから「鮭ってどんな魚か」「どのようにして鮭を放流しているか」の二つについて調べるようにしようとした。しかし、子どもの考えを教師主導で二つにまとめてしまったため、以後の追究が弱くなってしまった。

b. 本時の学習—②

本時の学習—②は、第三次の3時であり、これまで学習してきたことの全てを出し切って学習問題に取り組むことを願い、計画を立て実践したが問題点が残った。

まず、鮭の帰って来た数が一番多かった平成3年の14,583匹に対して何匹ぐらい放流するのかをたずねた時、授業記録のC₁₂～C₂₇までの考えが出されたが、板書での整理が数字ばかり書いてしまい、整理するどころか、かえって思考を混乱させることになり余分な時間を使ってしまった。この場面ではさらに約500万匹が放流されたという事実から、約500万匹放流して約1万5千匹帰って来た、すなわち1,000匹のうち3匹しか帰ってこなかったことになることと続けた。1,000匹のうちの3匹としたのは0.3%という割合を第5学年の1学期にどうやって理解させようかと考えた末のことであったが、約500万匹のうちの約1万5千匹という本当の数字と1,000匹のうちの3匹という割合の数字が混乱してしまい、授業記録T₁₆～C₄₅までに出てくる1,000匹のうちの3匹を割合の数字として考えている子どもと本当の数字として考えてしまった子どもが現れてしまった。このことにより「C₅₅3匹でも人は喜んで食べてくれるから」という発言になってしまったようだ。

次に学習問題について自分の考えを述べる場面では、C₄₉～C₆₇までの考えが出されたが、これらの考えが出された時にもう少し何らかの手立てをとって深めることができたのではないだろうか。例えば、「C₅₈ずうっと続けていけば、いつかはたくさんもどってくるかもしれないと楽しみにしている」という考えが出された時、それはここ（教室に掲示してある第二次でつくった「鮭ってどんな魚か」を調べまとめた模造紙）に書いてあることだね、と前に学習したことを生かすようにする。そうすることによって、C₅₈考えを述べた子どもも生きるし、模造紙を書いたグループの子どもたちも生きるのではないだろうか。そして、やがては教師がそのように支援しなくても自分から「ここに書いてあ

るように……」と発言できるようになるのではないだろうか。

その次に、ビデオを見た後の発言についてであるが、子どもはC₆₈～C₈₂までの考えを述べている。15人というたくさんの子が発言しているが、ビデオを見る必然性が弱かったことと前時までに鮭を水産資源として見る目が十分に養われていなかったことにより深まりのない考えを述べるにとどまっている。この場面での発言が一番大切であったが、教室から第三者的に考えたものであり、水産総合センターのSさんの思いに共感するまでには至らなかった。今後は自分とのかかわりを意識しながら、人物の思いに迫れるように支援したい。

(4) 教師の支援について

ここでは本單元における教師の支援の問題点について述べたい。教師の支援は本当に支援となっていたのであろうか。例えば、本時②において次のように場面があった。授業記録②のC₂₀～C₂₂である。これらの発言をしたのは一人の子どもである。鮭1匹が産む卵の数(約3,000個)と帰って来た鮭の数から放流数を出そうとしているのであるが、この子と教師との一対一の対話となっている。学級全体に返すことをしていない。「個が生きる」ことを意識するあまり全体への配慮が疎かになっている。これではせつかくいい考えを持っているのに生かしていないことになる。この子どもの質問に答えて支援しているつもりでいるが、実は支援になっていないのである。

Ⅳ. 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

第5学年であっても、地域教材を開発し、地域の人に焦点をあてた実践を行ったことにより社会科の学習に興味・関心を持ち、一人ひとりに学習意欲の高まりが見られた。

また、問題解決的な学習を行うことで、十分ではないとはいえ問題意識を持って学習しているようになり、さらに学習方法が分かったこ

とで学習の見通しを持てるようになった。

2. 今後の課題

今後は、さらに「個が生きる」ことを目指して次のような課題に取り組んでみたい。

- ①既習が生かせるように構成・展開を工夫する。
- ②自分とのかかわりが学習の中にあらわれるように支援する。
- ③学級全体を大切にしながら「個が生きる」ように支援する。

注

- 1) ①有田和正：社会科の活性化教室に熱気を！, 明治図書, 22., 1985
②有田和正：学習意欲の高め方, 明治図書, 11., 1984
③石川県小学校社会科教育研究会：豊かな自己実現をめざす社会科学習, 平成6年度研究紀要, 3-9., 1995
④東京学芸大学附属世田谷小学校：個のよさが生きる授業, 東洋館出版社, 14-19., 1995
⑤香川大学附属高松小学校：個が生きる認知過程の探究, 30., 1995
- 2) 前掲1), 22., ②, 11
- 3) ①前掲1) ②, 56-60.
②筑波大学附属小学校：社会科「学ぶ力」を育てる授業づくり, 明治図書, 13., 1990
- 4) ①石川県小学校社会科教育研究会：生きる力を育てる社会科指導の工夫, 平成4年度研究紀要, 3., 1993
②谷川彰英・臼井嘉一：小学校地域学習の授業づくり, 東京書籍, 14-17., 1991
- 5) 前掲1) ③, 6.
- 6) 前掲1) ③, 7.
- 7) ①前掲1) ③, 8.
②前掲1) ④, 14-16.
- 8) ①前掲1) ③, 9.
②文部省：小学校社会指導資料 新しい学力観に立つ社会科の学習指導の創造, 東洋館出版社, 7., 1993
- 9) ①前掲1) ③, 8.
②前掲8) ②, 6-7.